

《高校生のための本格ミステリ入門（日本編）》

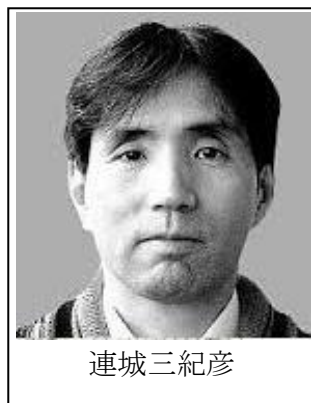
執筆 大村 拓

第4回 「〈新本格派〉勃興前夜の名手たち」

あわさかつまお れんじょうみきひこ しまだそうじ
～泡坂妻夫 連城三紀彦 島田荘司 笠井潔～



泡坂妻夫



連城三紀彦



島田荘司



笠井潔

○社会派全盛時代の終わり

1973年に日本を襲った石油危機（オイルショック）は、わが国の経済に大打撃を与え、戦後順調に続いていた高度経済成長を終わらせることとなった。物価は急騰し、企業の倒産は相次ぎ、多くの失業者たちが路頭に迷った。そしてこの時から日本人の価値観は以前とは変わらなくなってしまうのである。右肩上がりの経済成長がいつまでも続くことを信じて、会社にすべてを捧げることに何の疑問も抱かなかった当時の「会社人間」たちは、その考え方の虚しさに気づかされてしまったのだ。そんな中、個人や家族の幸福を第一とするような内向きの生き方も許容されるようになる。そしてこのような社会意識の変化が、ミステリの世界も徐々に変質させていくこととなる。高度成長期の申し子ともいべき社会派ミステリは徐々に勢力を失い、現実を背を向けて架空の殺人物語に耽溺するような、遊び心に富んだ本格ミステリが再び許容される気風が生まれたのである。その象徴的な出来事が、1976年に巻き起こった「横溝正史ブーム」であろう。横溝の描く現実とは大きくかけ離れた美しくも怪しい殺人絵巻が、多くの大衆から支持され、20年も前に書かれた小説が、次々とベストセラーになったことは、それだけ当時の大衆が現実逃避を夢見ていたという証拠であろう。ここに本格ミステリ復活の第一歩が記されたといつてよい。

しかしそうは言っても、この段階で本格ミステリがミステリ文壇の中心的存在とまでなったわけでは

ない。まだまだ本格ミステリに対する偏見は根強く、才能豊かな新たな本格派の書き手たちの不断の努力によって、少しずつ市民権を回復しつつあったというのが、ふさわしい表現だろう。確かに、1980年代のミステリ界のトレンドは、冒険小説だとみなされており、船戸与一や逢坂剛、森詠といった冒険小説の旗手たちが、人気を博していた。ちなみに冒険小説とは、国際的謀略や大災害などのスケールの大きな事件に巻き込まれた主人公が、不屈の闘志で窮地を脱するまでの手に汗握るストーリー展開を特徴とする小説のことであるが、一般的には推理の醍醐味は、極めて薄味なものが多い。

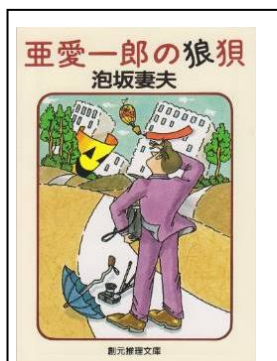
さてここでは、そんな時代に、新たな本格派の書き手として世に出てきた4人の名手たちを紹介してみよう。その4人とは泡坂妻夫、連城三紀彦、島田荘司、笠井潔のことであるが、彼らは皆それぞれ、独自のスタイルを確立することで本格ミステリの発展に絶大なる貢献をした人たちである。彼らの存在があったればこそ、後の1987年より始まる「新本格ブーム」なる本格ミステリの完全復活現象が可能になったと言って過言ではない。

1. 泡坂妻夫 (1933-2009)

泡坂妻夫は、『幻影城』という雑誌の新人賞を受賞してデビューした人である。1975年に創刊されたこの『幻影城』という雑誌は、戦前の探偵小説趣味に満ちあふれた、社会派とは正反対の方向を向いた本格志向の強い雑誌であり、それまでこの手のものに飢えていた本格ものの愛好者たちから熱烈に歓迎された。まさに本格ミステリ復活のきざしが見え始めた、この時代を象徴する存在であったといえよう。もしこれが少し前の社会派全盛時代だったら、かくもマニアックな雑誌など、とても発刊できなかったであろう。しかし一方、結局のところこの雑誌が1979年にわずか4年で廃刊を余儀なくされたことを鑑みるに、まだまだ本格ミステリが広く一般読者の支持を得ることは難しかった時代だったこともわかる。

泡坂はそんな『幻影城』のカラーとマッチした、正統派の本格ミステリの書き手である。彼のデビューは40歳過ぎと遅咲きであったため、デビュー当初から文章表現や登場人物の性格造型といった文学的な面においては、すでに豊富な人生経験に裏打ちされた大人の風格を持っていた。しかし彼はそれと同時に、常に読者を欺いて喜ばせてやろうという少年のような遊び心も存分に併せ持っていた。それは泡坂自身がアマチュアながら奇術の達人であり、常に人をだまして喜ばせようと意識してきたことと深く関係しているのである。そしてこのような大人と子供の要素の同居という点が、彼の作品に独自の魅力を与えているのである。このようなことはミステリ界においては案外難しいことで、往々にして子供のような遊び心を持った人は、まだ歳が若く、文章が稚拙な場合が多く、かといって人生の経験を積んで文章に味わいが出てくるところになると、今度は遊び心が枯れてミステリ本来の楽しさも失われてしまうことが多いのだ。

また彼の本職が紋章上絵師という、和服に家紋を入れるという昔気質の職人であったことから、彼のミステリ作品も一点一点実に丁寧に作り込まれた職人技を堪能できるという点も、泡坂のもう一つの魅力である。さらに本業が別にあることから、泡坂の基本的な執筆姿勢は、作家本人が満足のできるものを採算度外視して手作りしていくというものであり、生活のために乱暴に書き散らすことなど、終生無縁の人であった。以上のような要素が奇跡的に融合した泡坂作品は、どれも手抜きのない逸品ぞろいで、粗製濫造の出来損ないなどは一つとしてない傑作の宝庫なのである。



◎『亜愛一郎の狼』(★913ア 東京創元社) (1978年=昭和53年)

【内容】 すういとした上背と、眉目秀麗な容貌を持つ、ほれほれするような美形のカメラマン・亜愛一郎。しかし実は、からきし気が弱く、ドジで頼めない男でもあった。彼はよほど巡り合せが悪いのか、ある時は空港で、ある時は団地で、またある時は早朝の商店街やタクシーに乗っている最中まで、様々な場所で災難に巻き込まれて狼狽する。しかし誰もが首をひねる不思議な事件に対して、誰も思いつかないような奇抜な論理の筋道を見つけだし、鮮やかな名推理で解き明かすのだ。泡坂のデビュ



一作「DL2号機事件」や傑作「掌上の黄金仮面」・「ホロボの神」を含む全8編からなる傑作短編集。

これは泡坂の奇術師としての特徴が遺憾なく発揮された作品集で、とりわけ優れたミスディレクションのテクニックを堪能することができる。ミスディレクションとは元来は奇術の技法であり、観客の視線を見られたくない対象から巧みに誤誘導するテクニックのことである。たとえば、奇術師がタネを仕込もうとするなら、ポケットからハンカチを取り出す時ではなく、しまう時に仕込むという。一般に観客は、奇術師がポケットに手を突っ込むと、何かタネを仕込むのではないかと用心して注目するものであるが、その時はただ取り出したハンカチで汗を拭くだけだと、観客はこの時点で注意をそらしてしまう。しかし実際にはそのハンカチをさりげなくポケットに戻した時に、こっそりとタネを仕込んでおくのだ。このように観客の視線を巧みに誤誘導するミスディレクションは、奇術では必須の技法なのだが、これを活字の世界で存分に駆使してみせるのが泡坂のお家芸なのである。いかにも怪しげなシーンに読者の注目を集めておいて、実はその陰で繊細かつ大胆に真相に至る伏線を忍ばせておくなどというテクニックが、自在に使用されている。結局のところ読者は作者の術中にはまり、まんまと作者のねらいどおりにだまされているのである。

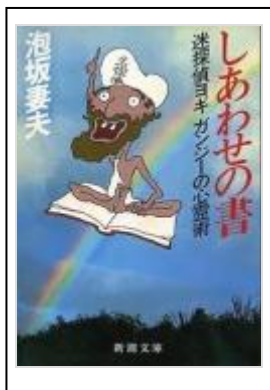
これこそが本格ミステリの第一とすべきテクニックであり、本短編集にはこのような技巧の中でも最高レベルのものがふんだんに盛り込まれているのである。私はこの本を読んだとき、「本格ミステリの将来は未来永劫安泰だ!」との思いを強くしたものだ。なぜならそれまでは、本格ミステリはいずれトリックが枯渇して絶滅するという、「本格ミステリ絶滅説」がまことしやかに唱えられていたからだ。しかし本書を読んでみれば、本格ミステリの核心はトリックの創始にあるのではなく、それを読者にどう見せ、どう誤らせるかというミスディレクションのテクニックにこそあるということに気づかされることだろう。極論すれば、トリックなどは陳腐なものであってもかまわない。その見せ方・隠し方のテクニックに斬新なアイデアがあれば、それだけで素晴らしい作品だと評価するものなのだと。泡坂はその方面にはまだまだ工夫の余地がたくさん残っているということを、実作をもって証明し、本格ミステリの進むべき未来を示してくれたのであった。

さて本作は、**亜愛一郎**という魅力あふれる名探偵が活躍するシリーズの第一作である。ちなみに亜が名字で、愛一郎が名前である。名探偵の人名録を作って五十音順に並べた時、必ず一番上に来るように名づけたという。こんな風にその名前からして人を食ったような名探偵が活躍するこれらの物語は、その味のある語り口により全編ほんわかとしたユーモアがあふれ、ミステリ部分を切り離したとしても、実に愉快的読み物となっている。なおこの亜シリーズはこの後◎『**亜愛一郎の転倒**』、◎『**亜愛一郎の逃亡**』（ともに★913ア 東京創元社）と続き、計3冊24編をもって完結する。3冊とも甲乙つけがたいハイレベルな作品集である上、最終話で亜愛一郎の隠された驚愕の秘密が明かされるので、是非とも3冊まとめて読んでもらいたいものだ。

さらに泡坂の好短編集をもういくつか挙げておこう。いかにもインチキ臭い心霊術師ヨギ ガンジーが活躍する◎『**ヨギ ガンジーの妖術**』(★913ア 新潮社)、美貌の女奇術師が活躍する◎『**奇術探偵曾我佳城全集 〈秘の巻〉 〈戯の巻〉**』(★913ア1,2 講談社)、風変わりな怪盗と刑事のユーモラスな闘争劇が楽しい◎『**妖盗S79号**』(★913ア 文藝春秋)など、どれをとっても極上の仕掛けと個性あふれるキャラクターの魅力を満喫できること請け合いである。



◎『しあわせの書―迷探偵ヨギ ガンジーの心霊術』（★913ア 新潮社）（1987年＝昭和62年）



【内容】ヨギと奇術の達人ヨギ ガンジーが入手した小冊子「しあわせの書」は、巨大な宗教団体「惟霊講会」が布教のために発行したものだった。実はこの惟霊講会では有力な信者たちが失踪する事件が相次いでおり、依頼を受けたガンジーは、弟子の美保子を潜入捜査に送り込んだ。そうこうするうち、ガンジーは惟霊講会の二代目教祖の継承問題と関わるようになり、次期後継者を決めるための断食修行の判定人を務めることになってしまう。しかしその裏では、驚くべき陰謀が進行していたのである。

本書は前代未聞のトリックが仕掛けられた異色の本格長編である。

泡坂の長編の代表作を挙げるなら、通常なら他にもっとふさわしい作品がいくらかでもある。たとえば中間部に挿入された奇術トリック集がそのまま事件解決の鍵となるという凝った構成の◎『11枚のとらんぷ』（★913ア 東京創元社）や、からくり玩具のうんちくが楽しい正統派の本格ミステリ◎『乱れからくり』（★913ア 東京創元社）。さらに題名から各章題、登場人物名にいたるまですべて回文（上から読んでも下から読んでも同じ文になる言葉遊び）づくしの遊び心に富んだ◎『喜劇悲奇劇』（★913ア 東京創元社）など、どれもはずせない傑作ぞろいである。にもかかわらずここで本書『しあわせの書』を挙げたのは、ひとえにこの本に仕掛けられたトリックが前例のない、あまりにも凄いものだからである。

話自体は、とある新興宗教内部で進行している連続失踪事件を調査していくという、ありがちなものである。主人公のドイツ人とミクロネシア人と大阪人の混血という怪しすぎる名探偵ヨギ ガンジーや、その怪力無双の第一弟子参王不動丸、美貌でお茶目な第二弟子本多美保子など、明るく魅力的なキャラクターたちが活躍する物語は読んでいて実に楽しいのだが、一方でいつもの泡坂と違って、文章はどこか読みにくく、ストーリー展開にもいつもの伸びやかさが無い。小説としてだけ評価すると、決して出来がいいとは言いがたいのである。でも実はこの本の主眼はそんなところにはない。この本には、かつて誰一人として試みることのなかった分類不能の驚愕のトリックが、全編にわたって仕掛けられており、それを第一に評価すべき作品なのである。このトリックを成立させるためには、気の遠くなるような手間暇をかける必要があり、にもかかわらず、その結果でできたトリックは、ある意味「しょうもない」と一言で片づけられても仕方のないような性質のものなのだ。また実は小説としての出来が今一つなのも、実はこのメイントリックと密接に関係しているせいでもある。こんな益の少ないことのために努力を惜しまないような作家など、古今東西どこを探しても泡坂以外にはおるまい。そう思うと馬鹿馬鹿しさを通り越して、畏敬の念すら覚えてくるのだ。これぞまさに、泡坂の遊び心と職人氣質の奇跡のコラボレーションなのである。

この本を読んだ人は、必ず他人にも勧めたくなるという。私もこれまで何人もの人に勧めて読んでもらったのだが、困ったことに読み終わっても、このトリックの存在に自力で気づいた人は一人もいなかったのである。実はそれほどわかりにくいトリックなので、もし皆さんがこの本を読み終わった時、「なんだ、大したことはないな」と思ったら、この肝心要のトリックを見落としていると考えて間違いはない。そんな時はもう一度、最後の部分をじっくり読み直してほしい。そしてこの超絶トリックを理解した瞬間、そのあまりの凄さに必ずや腰を抜かすことだろう。



2. 連城三紀彦 (1948-2013)

連城三紀彦も泡坂妻夫同様、『幻影城』の新人賞を受賞してデビューした人である。

連城の最大の功績は、それまで誰も試みなかった方法で、本格ミステリと文学を融合させたことにあ
る。ミステリと文学の融合というテーマは、古くから探究されてきたことであつたが、それまでは犯罪
を犯すに至った犯人の動機を深く掘り下げて描写することこそが、文学性につながる唯一の方法だと信
じられていた。そのため社会との関わりから生じた犯行動機をリアルに描くことを重視してきた、松本
清張に代表される社会派ミステリこそが、最も文学的な形態だと見なされていたのである。

しかし連城のとった手法は、そのような社会派的な手法とはまったく異なるものであつた。連城作品
は、まずその文章自体が立派な文学なのである。彼は華麗で装飾性に富んだ文章で物語を織り上げてい
く。特に男女の繊細な恋愛感情の機微を、花鳥風月にたとえながら色彩豊かに綴っていく文体は、匂い
立つほどに美しく、読者を甘美な恋物語の世界に誘いこんでゆく。しかしこれにだまされてはいけない。
文章の美しさに魅せられ、うっとりとして読み進めてきた読者は、最後になって背負い投げをくらわされる
はめになるのだ。物語の最後に明かされる真相は、それまでの美しく情緒的な世界からは想像もつかない
ような、冷徹に計算され尽くした巧妙な計画に基づくものなのである。美しい恋愛物語だと思われて
いた世界の背後に、かくも合理的に計算されたロジック（論理）が潜んでいたとは、およそ想像もつか
ないことなのだ。また真相につながる伏線があちこちに張り巡らされているのであるが、華麗な文体そ
のものが目くらましとなって、読者に容易にそれに気づかせないような構成になっているのである。つ
まり文学性自体が、真相から目をそらさせるためのミスディレクションとしての役割を果たしているわ
けで、完全に文学性を謎解きに従属させてしまっているのである。そしてこのロジックこそが、本格ミ
ステリの根幹をなす精神であるのだから、これはまぎれもなく本格ミステリそのものなのである。

従来、文学の世界では元来正反対のものと捉えられてきた、人間の情念と合理的な精神を一つにつな
げてしまう荒技は、まさに水と油を混ぜ合わせるような難度の高い技法であり、連城以外の人にはとて
もできる芸当ではない。そんな連城の描く世界は、決して社会派の描くようなリアルな世界ではなく、
むしろ大正ロマンを彷彿とさせるような夢幻的で情緒的な世界であるが、これが
ロジックにより一瞬のうちに反転してしまうギャップの面白さを是非体験して
みてほしい。

以上のように、連城はその文体だけで読者を魅了するほどの技量をもつ人であ
るから、ミステリ部分を切り離した作品を書いても、十分に文学として成立させ
てしまうことができる。実際そのようなタイプの作品も多く書いており、直木賞
（大衆文学に与えられる最も権威のある賞）を受賞した○「恋文」（★913レ 『恋
文・わたしの叔父さん』所収 新潮社）に代表されるような純粋な恋愛小説也多
い。しかしミステリ・ファンから言わせてもらえば、連城の真価はあくまでもミ
ステリ作品の方にあると強調しておきたい。



◎『戻り川心中』（★913レ 光文社）（1980年＝昭和55年）



【内容】 大正時代の天才歌人・苑田岳葉は二度の心中未遂事件で二人の女を死なせ、
その情死行を「桂川情歌」「菖蒲歌集」という歌集に遺してついに自害する。その結果、
この二冊の歌集は彼の代表作となった。しかし死後に彼の生涯を小説にまとめようと
いう親友は、苑田の死に不審を抱くようになる。情死の道行きをたどり、彼が解き明か
した衝撃の真相とは！（表題作）

本書は、連城のミステリと文学の融合という試みが究極の形で結実した大傑作
短編集である。本書には、表題作「戻り川心中」の他、「藤の香」、「桔梗の宿」、
「桐の柩」、「白蓮の寺」の全5編が収録されており、どれをとっても甲乙つけ
がたい高品質の作品ばかりである。各編には登場人物等のつながりはなく、おのおの独立した作品では
あるが、共通の雰囲気を持っているので、全体としての統一感は充分にとれている。まず時代設定は大

正から昭和初期までと共通しており、どれも皆、この時代に生きる人間の繊細な心の機微を余すところなく描き尽くしている。また各編とも何らかの形で花に関わるという共通のテーマをもっているのも、これらは「花葬シリーズ」と呼ばれている。（「花葬シリーズ」は全部で8作あり、残りの3作は、

◎『夕萩心中』（★913レ 光文社）に収録されている。）

花街に生きる遊女、人目を避けて生きる母と子、任侠の世界に生きる男、そして情婦との心中を繰り返す天才歌人。ここに登場する登場人物たちは、皆、日本の情緒を色濃く身にまとった純和風の男女たちである。連城は、彼らが織りなす美しくもはかないドラマを、特有の美しい文体で綴っていく。そしてどの作品とも、最後に衝撃のどんでん返しが待っているのは言うまでもない。ちなみにここで明かされる謎はすべて動機の謎（これをミステリ界では、ホワイダニットと呼ぶ）なのだが、それらは往々にしてその本質が感情の問題だけに、どうしても解釈されるような割り切れなさを残すことが多いものである。しかし本作ではその意外性に富んだ動機は、ガチガチのロジックに貫かれており、またそれが入念に張り巡らされた伏線によってしっかりと支えられているので、説得力は十分だ。これぞ本格ミステリならではの技法なのである。このように文学性と本格ミステリの論理性が、ぎりぎりのところで融合した本作は、奇跡のような高い水準に達している。これを読めば、どんな文学至上主義者であっても、「ミステリなんて文学じゃない」などとは、金輪際口にすることはできないだろう。

さて本書の品質を鑑みると、連城は本来短編向きの作家なのと言える。そこで◎『夜よ鼠たちのために』（★913レ 宝島社）や◎『宵待草夜情』（★913レ 角川春樹事務所）などの短編集も本作に次ぐレベルの出来なので、ここでも文学とミステリの理想的なコラボレーションを味わうことができよう。

一方、長編においては、短編ほどには連城の言葉のマジックが効かないためか、人工的な不自然さが目立ってしまう嫌いがある。しかしそうは言っても、◎『暗色コメディ』（★913レ 新潮社）や◎『私という名の変奏曲』（★913レ 文藝春秋）、◎『どこまでも殺されて』（★913レ 新潮社）あたりは、その人工的な不自然さにこそかえって連城らしさがよく表れており、読んでみて損のない個性的な作品である。また◎『黄昏のベルリン』（★913レ 講談社）は、ナチスドイツを扱った連城には珍しい国際謀略ものだが、その芳醇な文体と強烈などんでん返しは、いつもの連城ミステリ以外の何ものでもない。とりわけその衝撃のラストは、連城作品の中でも随一のものかもしれない。



3. 島田荘司 (1948-)

島田荘司の目指すミステリは、冒頭に提示される現実にはありえないような幻想的な謎が、最後には論理的に解明される物語であるという。これはポーによる創始以来、ミステリの典型とされてきたスタイルで、まさに本格ミステリそのものである。その意味において、島田は本格ミステリの保守本流を目指した人であった。このようなミステリ観は、島田がデビューした1980年代初めにおいては、時代遅れ

のものと見下されることが多く、実際、島田もそのような偏見にさらされ、苦勞することが多かったという。全盛期の勢いは衰えたとはいえ、この時代はまだまだ社会派が優勢を保っていたのである。

それではこのように、ある意味古めかしい島田のミステリが、時代の流れに抗して評価を高めていったのは、いったいなぜだろう。それはひとえに、島田が創始した数々のトリックがあまりに斬新で、常に読者の度肝を抜き続けてきたからに他ならない。島田の創始したトリックは、物理的なトリックが中心である。物理的トリックとは、機械仕掛けなどを利用して成立させるトリックのことで、人間の盲点を利用する心理的トリックとは対極をなすものである。通常、物理的トリックは応用がききにくく、一度使ったトリックを再利用することは難しい。そのため一般には、この手のトリックは開拓しつくされて徐々に枯渇し、絶滅の危機に瀕していると考えられてきた。そんな中、島田が次々に生み出していたトリックは、ほとんど前例のないものばかりで、「まだこんな大トリックが手つかずで残っていたのか」と読者を驚嘆させることとなる。島田のトリックが斬新であり続けられたのは、人間の身体を大きなメカニズムの中の単なる道具として利用するような大胆な発想のものが多く、そのスケールの大ききゆえ、先人たちの手がついていなかったからだといえよう。その常識をはるかに超えたスケールの大きさが逆に盲点になって、読者に衝撃を与え続けたのである。

このようにトリック重視の作風は、トリックよりもロジックやプロット（筋書き）を重視し、トリックの中でも物理的トリックよりも心理的トリックを重視する昨今の風潮の中では、明らかに時代に逆行する異色の存在であった。そんな彼の作風も、徐々にトリックを創始する力にかげりが見え始めるが、しかしそれと反比例するように、どんどん物語を語る力が向上してきた。特に1990年代以降の作品は極端に重厚長大なものが多いのだが、とにかくストーリー展開が抜群に面白く、分厚い本も一気に読ませてしまう。そのため彼は現在に至るまで、常に本格ミステリの最前線に位置し続けられているのである。

また島田は、著作だけではなく、才能ある若手を支援してデビューさせる方面でも力を注いだ人だ。特に1987年以降、綾辻行人、歌野晶午、法月綸太郎、我孫子武丸といった若手の隠れた才能をいち早く見抜き、ずぶの素人でしかなかった彼らを世に出すことに尽力してきた。その結果、未曾有の本格ミステリ復興ムーブメント、いわゆる「新本格ブーム」が到来したのであるから、島田こそがその陰の立て役者であったと言える。以上のように創作と新人発掘の両面を通じて、本格ミステリの発展のために獅子奮迅の活躍をしてきた島田の功績は、計り知れないほど巨大なのである。

◎『占星術殺人事件』（★913シ 講談社）（1981年＝昭和56年）



【内容】 物語はある1人の画家の狂気に満ちた手記から始まる。そこには占星術と錬金術の知識に基づいて、自分の6人の娘たちの最も優れた部分を切り取り、1人の完璧な人間を作り出す計画が記されていた。しかし、この画家が密室状態のアトリエの中で殺された後、その6人の娘たちが、手記の内容通りに、身体の1部分を切り取られ、日本各地で発見される。迷宮入りしたこの難問を、40年の時を隔てて名探偵御手洗潔が解き明かしたその驚愕の真実とは？

本作は、江戸川乱歩賞の最終候補作となったのを認められ刊行された、島田のデビュー作である。ここにはすでに島田の求めたミステリの理想型が体現されている。まずは冒頭に、6人の娘たちの身体から一部分ずつを寄せ集めて完璧な人体（これをアゾートと呼ぶ）を作り出そうとする、狂気に満ちた画家が登場する。この発端の謎はあまりにもまがまがしいものであるが、それゆえ読者が目を逸らすことを許さぬ圧倒的な迫力をもっている。はたしてアゾートは本当に誕生したのか。常識ではありえないとしかいいようのないこの異常な試みも、島田の異様なまでに迫力をもった文章の魔力を借りて、読者にリアリティをもって迫ってくるのである。そして最後に明かされるアゾートの正体は、古今東西のミステリの中でも、読者に最大級の驚きを与えるものだろう。まさに「まだこんな大トリックがあったのか！」と叫び出したくなるくらいの衝撃度である。

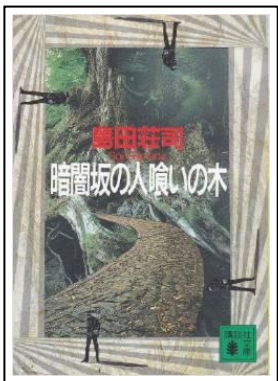
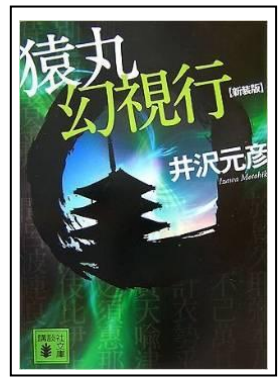
本作で探偵役を務めるのは、占星術師^{みたらいきよし}御手洗潔である。彼は自信過剰ともいうべきワンマンぶりで周囲を置き去りにしながらも圧倒的な推理力で、真相に迫る。そんな彼のキャラクターは、ホームズの伝統を継ぐ典型的な名探偵像だといえる。またワトソン役の石岡和己も本家ワトソンをさらに凡庸にしたレベルの男で、御手洗の天才性を浮き立たせる点で、恰好の存在となっている。

つまり本作には、発端の魅力的な謎、名探偵の名推理、そして驚愕の真相と、本格ミステリが必要とする三要素がすべて最高のレベルでそろっているのである。本格ものは時代遅れだと見なされていたこの時代に、本格ミステリ以外の何ものでもない本作が、その圧倒的なレベルで世に誕生したことは、その後のミステリのありようを根本から変えてしまうほどの一大事であったのだ。

しかし本作は、乱歩賞の最終選考に残ったとはいえ、結局は落選してしまうのである。現在では日本ミステリ史上の五指には入る名作と評価されている本作を、何ゆえに当時の選考委員たちは見落としてしまったのか。おそらくそれは、本作が典型的な本格ミステリのスタイルで書かれていた点が災いしたのだと考えられる。社会派がミステリのあるべき姿で、本作のような本格派のスタイルで書かれたものは、時代遅れで評価に値しないとみなされてしまったのだろう。当時はそれほどまでに本格ものが低く見られていたわけである。確かにこの年に受賞したのは、井沢元彦の◎『猿丸幻視行』（★913イ 講談社）という歴史ミステリの秀作（本稿「高校生のための本格ミステリ入門＜日本編＞第2回参照）であったので、こちらが受賞したことには何の異議もないが、それでも本作との2作同時受賞は当然であったろう。島田はこの落選の悔しさを武器に、この後旺盛な執筆活動を続けていき、現在では押しも押されぬ大家と見なされる存在とまでなったのである。しかし返す返すも本作のような歴史に残る名作を見落としてしまったことは、乱歩賞史上最大の汚点と言わねばなるまい。

ちなみに本作のメイントリックは、後にコミックの『金田一少年の事件簿』でそっくり盗用されてしまっている。後世の人から改良されて使われていくのは、優れたトリックの宿命であって、それ自体はしょうがないことなのだが、『金田一少年の事件簿』での使われ方は、本家を著しく劣化させた質の低いものであり、何とも言い訳のしようもない悪質な行為であった。『金田一少年の事件簿』は高校生諸君にもお馴染みのものであるだけに、ひょっとするとその問題の盗用作を読んでしまっているかもしれない。もし読んでいたなら、きっと島田の『占星術殺人事件』を読んだときの驚きは半減してしまうことだろう。非常に悲しく残念なことであるが、もはや取り返しはつかないのだ。

さて本作で初登場した名探偵御手洗潔は、この後◎『斜め屋敷の犯罪』（★913シ 講談社）で、北海道の原野に建つ奇怪な館を舞台としたスケールの大きなトリックを解明し、再び本格愛好者たちの度肝を抜くこととなる。さらに1990年代からは、毎年1作ずつ発表された重厚長大な作品群の中で活躍していく。江戸川乱歩を思わせる怪奇色漂う◎『暗闇坂の人喰いの木』（★913シ 講談社）や古代エジプトのピラミッドの謎と現代の殺人事件を結びつけた◎『水晶のピラミッド』（★913シ 講談社）、女吸血鬼とも呼ばれた実在の人物に材をとった◎『アトポス』（★913シ 講談社）などがその代表で、島田の圧倒的な語り口の巧さと相まって、御手洗は日本を代表する名探偵と称されるまで、その人気を高めていった。



◎『奇想、天を動かす』（★913シ 光文社）（1988年＝昭和63年）



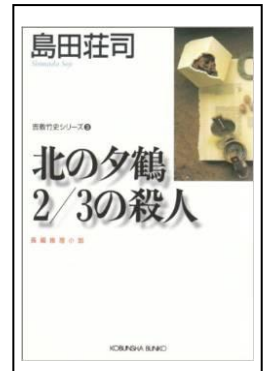
【内容】 浅草で浮浪者風の老人が、消費税12円を請求されたことに腹を立て、店の主婦をナイフで刺殺した。だが老人は氏名すら名乗らず完全黙秘を続けている。この裏には何かがある。警視庁の吉敷竹史刑事の懸命な捜査の結果、三十年前に北海道のローカル線で起こった怪事件が浮かび上がる。ここでは幻想としか考えられないような怪奇現象が、どうやら現実には起こっていたらしいのだ。壮大なトリックを駆使し、本格推理と社会派推理とを見事に融合させた傑作。

本作は、非現実としか思えない幻想的な謎を、最後には現実のものとして解決させるという、島田の理想としたミステリの完成型と言ってよい作品である。被疑者の老人が獄中で書いた江戸川乱歩風の手記には、およそ現実とは思えないような怪奇な現象ばかりが記されていた。ピエロの死体が列車内のトイレから一瞬で消失してしまったり、首なしの轢死体がよみがえって歩き出したり、赤い目をした白い巨人が現れて列車を転覆させてしまったり…。しかしこれらはすべて実際に起こった出来事であったのだ。このような怪奇現象を大小様々なトリックを駆使しながら、現実のものとしてしまう島田の豪腕ぶりはすさまじい限りだ。これぞ島田ミステリの真骨頂と言えよう。

また本作は、本格ミステリであると同時に社会派の要素も強く併せもっているのが特徴である。当時導入されたばかりの消費税問題をはじめ、犯人の動機にも、わが国特有の深刻な差別問題が深く関わっている。またその背後にある日本人特有の精神構造にまでも、著者の鋭い批判のメスが入れられている。かねてより、本格派と社会派の融合を試みてきた島田の一つの到達点がここにある。

さて本作で探偵役を務めるのは、警視庁捜査一課の刑事^{よしきたけし}吉敷竹史である。彼はコツコツと靴底をすり減らしながら徐々に真実に迫っていく凡人型探偵で、クロフツや松本清張の系譜に連なる典型的な社会派型の探偵である。つまり、デビューして数作後から書き始められたこの吉敷の登場するシリーズは、島田が社会派の枠組みの中で本格ミステリを書こうと明確に意図したものなのである。その意味において吉敷は、本格ミステリの典型ともいえるべき天才型探偵御手洗潔とは対極をなす存在なのである。

そもそも典型的な本格ミステリでデビューした島田が、何ゆえに社会派的要素を取り入れようとしたのかという、それはあくまで本が売れるようにするためだったという。島田のデビューした1980年代前半では、御手洗もののような純本格派風の作風では多くの読者の支持は得られず、そのため当時主流であった社会派風のスタイルをとりながら書かざるをえなかったという。ただそんな中にも何とか独自の個性を盛り込もうとして、吉敷刑事は社会派にありがちな中年のさえないオヤジにはせず、若いイケメンに設定している。



しかしその結果生み出された吉敷竹史というキャラクターは、残念ながらどっちつかずの魅力に乏しいものとなってしまっており、個性の際だつ御手洗潔との落差は大きい。そのため、「新本格」全盛時代になって本格派風の作品への偏見がなくなると、再び御手洗潔が中心的に起用されていくようになり、吉敷竹史の影は徐々に薄くなっていく。本作はそんな吉敷ものの集大成とでもいえるべき傑作であるが、他に吉敷ものの秀作として、伝奇趣味とトラベル・ミステリが融合した◎『出雲伝説7/8の殺人』（★913シ 光文社）や、島田得意のスケールの大きいトリックが炸裂する◎『北の夕鶴2/3の殺人』（★913シ 光文社）などの初期作品が挙げられる。

ちなみに本作のトリックも、『金田一少年の事件簿』で盗用されてしまっているという。これまた何とも罪深い話である。

4. 笠井潔 (1948-)

さて今回取りあげる最後の人は、笠井潔である。彼の最大の功績は、本格ミステリと哲学を融合させた点にある。そもそも哲学と言われても、大方の高校生にはピンとこないに違いない。もし高校で「倫理」を選択している人ならば、ある程度その基本は理解していることだろうが、そうでない人には、これまで一度も触れることのなかった、まったく馴染みのない学問領域であろう。一言で言えば、哲学とは真実や善・美といった抽象的な価値を追い求めていく学問のことである。その哲学の根本には、ロジック（理性・論理）を重視する精神があるのだが、本格ミステリもまたロジックに基づく文学形態であるから、この両者の相性は案外いいのかもしれない。しかしそれにしても、哲学と本格ミステリを結びつけようなどという試みは、笠井以前にはまるでなかった発想であった。

笠井が取りあげる哲学思想は、フッサール、ヴェイユ、バタイユ、ハイデッガー、フーコー、ラカンといった、哲学思想の中でもとりわけ難解な現代思想であり、これらを毎回かなりの分量を割いて深く追究する。その内容は難解を極め、読者が理解するには相当の苦勞を強いられることだろう。これがヴァン・ダイン（「本格ミステリ入門＜海外編＞第5回」参照）のような単なるお飾りとしての専門知識なら、そこだけ読み飛ばしてしまえばよいのだが、笠井の哲学談義は、ミステリの核心部分と密接に結びついているので、そうはいかないのが何とも厄介である。その意味においては、笠井作品は高校生が手を出すようなレベルのものではないとも言えるのだが、一方でよく考えてみると、哲学が難解なのは何も高校生に限ったことではなく、大人になったとしても同じことなのである。大人であろうと子供であろうと、彼の作品を読み解くには、難解で抽象的な術語を理解しながらじっくりと読み進めていくしかない。しかし小説の楽しみ方は、すらすらと読み飛ばしていくというやり方だけとは限らない。ある程度理解できるまで、何度も読み返しながら時間をかけて読み進めるという楽しみ方もあるのではないだろうか。それならば笠井ミステリを題材にして、若いうちにこういう読書の楽しみ方を覚えるということも悪いことではないだろう。

一方、笠井のミステリは、本格ミステリとしては、極めてオーソドックスな部類に入る。密室殺人、見立て殺人、首のない死体、孤島での殺人、吸血鬼などのオカルト趣味といったお馴染みの趣向を多用している。ほとんど時代遅れともいえる、こういった古典的な設定のミステリが、哲学と融合させるという笠井独自の魔法をかけると、瞬時に格調高い物語に変じる。ここにこそ、笠井の独創性があるのである。

◎『サマー・アポカリプス』（★913カ 東京創元社）（1981年＝昭和56年）



【内容】 発端は、灼熱のパリで見えざる敵にカケル（矢吹暎）が狙撃された事件だった。ナディアはカケルを誘ってパリを離れ、友人の招きに応じて南フランスにある富豪の別邸に滞在することとなった。しかし二人はそこで、友人一家を襲う奇怪な事件に遭遇することになる。中世異端カタリ派の聖地を舞台に、ヨハネ黙示録の四騎士がさまよい歩き、黙示録を主題とする殺人が四度繰り返される。二度殺された死体、見立て殺人、古城の密室、秘宝伝説…。いかにも本格ミステリらしい道具立てと深遠な哲学思想が融合した超大作。

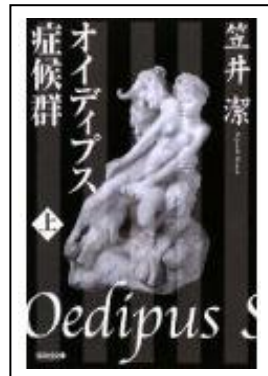
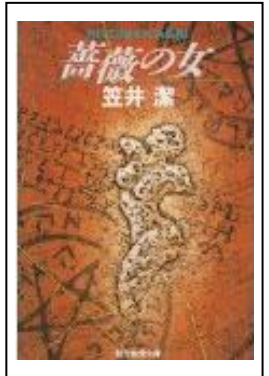
本書の舞台は、南フランス。ここはキリスト教の異端の一派カタリ派の拠点だった場所で、かつてこれを征伐するために派遣されたアルビジョア十字軍と戦った城壁都市である。このように高校の「世界史」ではまず習うことのない南フランス史を背景としながら、聖書のヨハネ黙示録にちなんだ連続殺人が勃発する。ちなみに黙示録とは、『新約聖書』の中でも特に解釈が難しい象徴的な内容で有名な文書のこと、これを英語で「アポカリプス」という。また哲学思想としては、フランスの女流哲学者シモーヌ・ヴェイユという、これまた高校の「倫理」では絶対に習うことのない現代思想に深く言及している。このように日本人にはあまり馴染みのない専門知識に満ちあふれた本書は、決して読みやすいとは言えないものだが、このように圧倒的なうんちくに囲まれて読書をするというの

も、読書の楽しみ方の一つであるには違いない。

一方ミステリ部分は、伝統的な道具立てを取りそろえた、まさに本格ミステリの王道を行くような作風でもあるから、本格ミステリ愛好者なら、その雰囲気だけでも幸福な気分になれることだろう。このように古典的な本格ミステリの内容を、格調高い思想や物珍しい舞台と融合させることで、まるで新しい価値を創造しているのはさすがである。

さて本作で、探偵役を務めるのは、**矢吹駆**という日本人である。本作の登場人物の中では唯一の日本人である。彼はフランスの大学で哲学を学ぶ学生であるが、非常に無口でいかにも個性的な思索家である。彼の推理方法は、現象学という哲学思想に影響を受けた「本質的直感」というもので、これは個々の手がかりを推理して唯一の真理に至るのではなく、事件の全体像を哲学的に直感し、その本質を見抜くというものだというのが、これまた大変難解なものである。そして彼の助手を務めるのが**ナディア・モガール**という女子学生で、いささか情緒不安定なところのある勝ち気な性格であり、口当たりのよい典型的なアシスタント・タイプとは一線を画している。また事件の背後にはニコライ・イリイチという共通の黒幕が隠れており、今後、作を重ねるごとに、カケルとイリイチの対決が進行していくこととなる。

カケルの初登場作は、◎『**バイバイ、エンジェル**』（★913カ 東京創元社）で、その後に本書、続いて◎『**薔薇の女**』、◎『**哲学者の密室**』（ともに★913カ 東京創元社）、◎『**オイディプス症候群 上・下**』（★913カ1,2 光文社）、◎『**吸血鬼と精神分析**』（★913カサ 光文社）と、現在まで6作に登場する。これらすべてが、哲学と本格ミステリの融合を試みた作品群であるが、とりわけ第4作の『哲学者の密室』以降は、哲学的部分が肥大化することで、全体の分量も重厚長大化して一段と読みにくくなっていくので、より一層の覚悟が必要になる。またこれらのカケル・シリーズでは、後続の作品で前の作品の真相を明かしていることが多いので、出来るだけ発表順に読む方がよいだろう。



◎ミニ特集 多作家のベストセラー作家たち

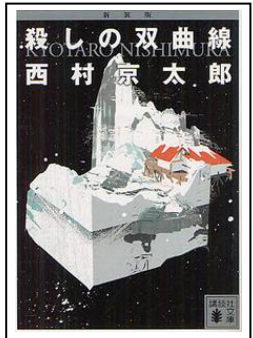
さてここまで読んできた皆さんの中には、一般に名の知れたミステリ作家たちが紹介されないのを、不思議に思っている人がいるのではないだろうか。たとえば、西村京太郎、赤川次郎、内田康夫といった作家たちのことだ。彼らは日本を代表する売れっ子のベストセラー作家で、当時毎年公表されていた高額納税者番付の作家部門では、常に上位を独占していた人たちだ。そんな彼らに共通する特徴は、とにかく執筆スピードが速く、次々と途切れることなく新作を発表し続けてきたことだ。多いときには、毎月1冊ずつ刊行などはざらであった。

しかし本格ミステリは、細部にまで神経をいきわたらせて書かなければならないタイプの文芸

なので、決して量産がきくものではない。それを毎月刊行するということがなれば、どうしても質の低い作品を粗製濫造せざるをえない。当然それでも読者が離れていかないだけの力量がなければ、書き続けることも許されないのだから、その読みやすさや着想の素晴らしさなどは、一流のものであることは間違いないのだが。これをハンバーガー・ショップにたとえるなら、手作りハンバーガーを提供する味自慢の個人経営のレストランと、全国展開するマクドナルドのようなチェーン店の違いとでもいえようか。グルメ向きに紹介するなら味自慢の個人レストランを挙げるしかないが、ハンバーガー業界全体の発展という観点からすれば、マクドナルドの果たしている役割の方が、はるかに大きいとも言えるだろう。これと同じように、優れた品質の本格ミステリを紹介しようとするなら、どうしても今回挙げた泡坂、連城、島田、笠井といった名手たちが入念に書き上げた傑作群を取りあげざるをえないのだが、一方、一般読者層に本格ミステリを浸透させた功績でいえば、これら多作家たちの存在も決して軽く見てはならないのだ。

概して一般的な読者たちは、必ずしも本格ミステリの力作を求めているわけではない。この手のものはえてして凝りすぎていて、どうしても一部のマニア向けという面をもっている。一方、面倒な推理もあまりなく、行き帰りの通勤電車の中でスラスラと読めてしまうような軽い作品を求めている層も相当数いるのである。そして、こういった読者層のニーズにピタリと一致したのが、これらの多作家たちであった。またこれらの層は、ちょうどこの時期にスタートしたテレビの2時間ドラマの視聴者層ともきれいに重なってくるのである。毎度同じパターンを踏襲する2時間ドラマでは、やはりとっつき安さが第一で、凝ったトリックやロジックなどはお呼びでない。そのためこれら多作家たちの作品の多くは、2時間ドラマの原作となり、テレビでの人気と相まって、原作の売り上げも伸ばしていったのである。以上のように、本格ミステリの名手たちが本気で書いた傑作群と、多作家たちが書いたベストセラー群は、ともに車輪の両輪となって、ミステリ界の発展に寄与してきたのだと言えよう。

それでは、これらの多作家たち一人一人について、簡単に解説しておこう。まず西村京太郎であるが、彼は現在に至るまで、十津川警部をシリーズ探偵とする「トラベル・ミステリー」で人気を博している作家である。西村のデビューは1964年と案外古く、その当時は一作一作ていねいに手作り感あふれる作品を書いていた。この時代の代表作は、社会派ミステリの秀作◎『四つの終止符』（★913ニ 講談社）や◎『天使の傷痕』（★913ニ 講談社）、クリスティーの『そして誰もいなくなった』に挑戦した本格ミステリ◎『殺しの双曲線』（★913ニ 講談社）、スケールの大きい誘拐サスペンス◎『華麗なる誘拐』（★913ニ 講談社）などで、この頃より独創性に富んだ着想と読みやすい文章には一流のものがあつた。その後「トラベル・ミステリー」の秀作◎『寝台特急殺人事件』（★913ニ 光文社）で一世を風靡するすると、これを機に1980年代から一気に量産体制に突入した。それ以降の膨大な作品群は、天性の着想の良さは垣間見られるものの、残念ながらこれだけの量を書いて、なおかつ作品の質を保つことなどできようはずもなかった。



赤川次郎はユーモア・ミステリの書き手として、デビューの数年後より、旺盛な執筆量で売れる作品を大量に書いてきた人である。彼の作品の長所は、意表をつく奇抜な設定と、どこにでもいるような普通の人たちの人物造形の巧みにある。彼の創作法の特徴は、デビュー当初より一貫して、あまり細かいことは考えずに、とにかく発想のおもむくままに書き進めるというスタイルで、これにより抜群の読みやすさを誇る一方、本格ミステリとして見れば、細部に矛盾を残したまま終わる、「出たところ勝負」のような欠点をもつ。それでも初期の頃にはその設定の奇抜さだけでも、充分評価できる佳作が集中している。飼猫が探偵で飼主の刑事がワトソン役という設定の妙がさえる「三毛猫ホームズ・シリーズ」の第1作◎『三毛猫ホームズの推理』（★913ア 角川書店）、中年のさえない警部と美人の女子大生が恋人同士で探偵役を務める「幽霊シリーズ」の第1作

◎『幽霊列車』（★913ア 文藝春秋）、さらには各章ごとにまるで違った文体を駆使した技巧派サスペンスの傑作◎『マリオネットの罠』（★913ア 角川書店）などが、この頃の代表作である。そんな中でも、一見平凡な家族が実は、泥棒、殺し屋、弁護士、詐欺師、警察官で構成されており、それぞれの正体を知るのは弁護士の次男のみ、というとんでもない設定の◎『ひまつぶしの殺人』（★913ア 光文社）は、赤川の特徴が最大級に発揮された傑作である。

内田康夫は、先の二人にやや遅れて1980年代後半から1990年代前半にかけて数多くの作品を量産し、一躍人気作家となった。彼の作品は、一般に「旅情ミステリー」と銘打たれている。この看板は、西村京太郎の「トラベル・ミステリー」と区別がつけづらいが、一応「トラベル・ミステリー」は列車の旅に関わるミステリで、「旅情ミステリー」は、宿や名勝地そして旅先での出会いなどに関わるミステリと分類しておこう。そんな内田の「旅情ミステリー」の特徴は、とにかく平易で読みやすく、ストーリーが流れるように展開することである。一方、本格ミステリとして見ると、トリックやロジックなどにはこれといった工夫もなく、個性に乏しい。それでも内田のミステリがこれほど幅広い読者から歓迎されたのは、ひとえにその名探偵浅見光彦の存在あったればこそであろう。浅見は由緒正しきエリート一族の落ちこぼれ次男坊で、売れないルポライターを生業としている。彼は旅先でしばしば事件と関わることになるのだが、名探偵とは言っても、その推理力にさほど目を見張るようなところがあるわけではない。しかしその威張らない気弱な性格と、弱者に対する優しいまなざしは大変魅力的で、その見た目のかっこよさと相まって、万人に愛されるキャラクターとなっている。現在では浅見光彦の名は、日本ミステリ史上に登場した数々の名探偵の中でも、トップクラスの知名度と人気を誇ると言ってよいだろう。そんな浅見の代表作を挙げるとなると、その初登場作◎『後鳥羽伝説殺人事件』（★913ウ 角川書店）や映画化もされた大作◎『天河伝説殺人事件 上・下』（★913ウ1,2 角川書店）あたりとなるだろうか。これらはタイトルだけを見るといかにも横溝正史のようなおどろおどろしい伝奇ミステリを連想させるが、どちらかというと松本清張に近い地味な作風である。ただし浅見の推理の仕方や、事件の背後に潜む人間関係が謎



解きの中心となる場所などは、横溝正史の強い影響が見てとれる。

この他の多作家といえば、笹沢左保、斎藤栄、山村美紗、森村誠一、吉村達也等の名が挙げられよう。

それでは最後に、ベストセラー作家と言うなら、現在わが国で最も売れる作家の一人、**東野圭吾**についても、言及しておく必要があるだろう。東野圭吾がベストセラー作家であることは間違いないが、多作家であるとは言い難い。なぜなら彼はデビュー以来年間3、4冊

という刊行数を維持しており、年間10作以上書くのが当たり前だった上記の多作家たちとは明らかに一線を画している。そのため現在に至るまで書き過ぎによる質の劣化は見られず、常に一定以上の水準を維持し続けているのである。また東野は、本格ミステリ◎『放課後』（★913ヒ 講談社）で江戸川乱歩賞を受賞してデビューした人であるが、その後は本格ミステリに偏らず、恋愛小説、パニック小説、パロディ小説など様々なジャンルの作品を書いている。この執筆姿勢により、特に量産の難しい本格ミステリを書き過ぎることを回避し、質の維持を図っているのである。そんな東野の本格ミステリにおける二大看板は、「加賀恭一郎シリーズ」と「ガリレオ・シリーズ」であろう。「加賀恭一郎シリーズ」は、刑事の加賀が粘り強い捜査で真相に迫るのを特徴としており、中でも特異な構成をした、日本橋を舞台にした連作ミステリ◎『新参者』（★913ヒガ 講談社）が代表作である。一方、「ガリレオ・シリーズ」は天才科学者・湯川学博士が、科学の最先端知識を利用した殺人トリックを見破る理系ミステリだが、代表作◎『容疑者Xの献身』（★913ヒ 文藝春秋）は、むしろ動機の深さで読者を感動させる作品となっている。この両シリーズとも、阿部寛、福山雅治という当たり役を得て、映画やテレビのドラマでも多くのファンを獲得している。また東野は、バリバリの本格ミステリ・マニアに向けたミステリも書いている。◎『ある閉ざされた雪の山荘で』（★913ヒ 講談社）は、本格ミステリのとある約束事を逆手に取ったトリックが見事な作品で、ミステリ・マニアだけがその真価を理解できるというものである。また◎『名探偵の掟』（★913ヒ 講談社）は、本格ミステリの常道をおちよくった怪作パロディで、マニア限定の笑いを提供してくれている。



私の一押し!!

例によってこのコーナーでは、一般的評価とは関係なく、私が個人的に偏愛する作品を紹介していきたい。

◎岡嶋二人『チョコレートゲーム』（★913オ 講談社）（1985年＝昭和60年）



【内容】 小説家の近内は、名門中学に通っている息子の行動がおかしいことに気づいた。学校を休みがちになり、体にアザを作って帰ってくることもあったのだ。やがて近内は新聞で、息子の通う私立中学で同じクラスの生徒が殺されたことを知る。その生徒は死ぬ前に「みんなジャックのせいだ」と気狂いのようになっていたという。ジャックとは何者か？ そして、彼らの間で行われていた「チョコレートゲーム」とは？ そんな中、息子が自殺してしまう。それは殺人事件の罪を告白したものとしか見えなかった。

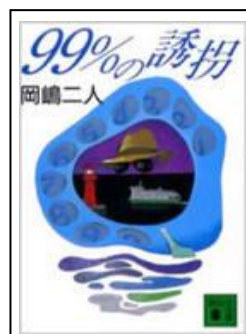
本作で解かれる謎は、わが子の真実の姿である。わが子が殺人を犯して自殺したとしか思えない状況の中、あくまでも息子の無実を信じる父親が、周囲の冷たい視線にもめげず、単身で調査を進め、ついには隠された真実を見つけ出す物語である。この父親は、それまでは決して子供に理解のある人ではなかった。息子をほったらかしにして仕事のみに生きてきたのである。そんな彼が、息子を失ってはじめてそれまでの自分の姿勢を恥じ、それを償うべく真実探究にまい進する姿は、深く読者の胸を打つことだろう。同じ屋根の下に暮らしていても、思春期を迎えた子供は、親にとってまったく正体のつかめない謎の存在となる。そんな身近でありながら、誰もが頭を悩ませている問題をテーマにしたところに着眼の良さがある。近年子供たちが起こす重大犯罪に、親がなすすべをもたないケースがしばしば起きている。このことは、このテーマがいまだ今日性を失っていない証拠であろう。

そして最後に明かされる中学生たちの恐るべき真実にも、是非期待してもらいたい。またこれらの謎解きには、ちょっとしたアリバイ・トリックや犯人を特定するロジックなども使われているので、本格ミステリとしても十分に評価できる作品となっている。

作者の岡嶋二人は、この時代に活躍した二人一組の共作作家である。傑作◎『焦茶色のパステル』（★913 オ 講談社）で乱歩賞を受賞すると、その後、本格ミステリの精神に貫かれたサスペンスものの書き手として、旺盛に執筆活動をしてきた。特に誘拐ものを得意とし、「人さらいの岡嶋」の異名をとる。

◎『あした天気にしておくれ』、◎『どんなに上手に隠れても』、◎『99%の誘拐』

（ともに★913 オ 講談社）などがそんな誘拐ものの代表作である。しかし、この二人は当初より仲が悪かったらしく、結局8年でコンビを解消してしまう。現在ではそのうちの一方が井上夢人というペンネームでサスペンスやホラーを中心に、幅広いジャンルの個性的な作品を書き続けている。中でも◎『風が吹いたら桶屋がもうかる』（★913 イ 集英社）は、この作家としては珍しい本格ものの好短編集である。



- 【注】 1.◎『 』で表したものは、当時あるいは現在でも出版されている本の書名です。
○「 」は、小説の題名です。
2.★で表したものは、習志野高校図書館が所有している本です。NDCも表記します。
3.小説の内容については、書体を違えています。

次回は 第5回 「〈新本格〉ブーム到来！」

～ あやつじゆきと 綾辻行人 のりづきりんたろう 法月綸太郎 ありすがわありす 有栖川有栖 山口雅也 北村薫 ～

いよいよ、完結 最終回です！

2014.10.27 更新